

# フィリピン諸言語の動植物名詞由来の動詞： 言語に反映される自然と文化、生活様式について

木本幸憲

## 1. はじめに

言語の役割といえば、第一に挙がるのがコミュニケーションという対人的相互行為であろう<sup>1</sup>。しかし言語は我々の思考や認識にとっても重要な役割を演じている。言語記号は、世界を切り分け、意味づけを与える役割があるからである。それを考えるために、日本語の「出世魚」という現象を見てみよう。日本語には、成長段階に応じて名前が変わる「出世魚」があり、ブリはその例である。例えば鱒魚の盛んな京都府丹後地方では小さいものからツバス、ハマチ、マルゴ、ブリと名前を変える。一見するとこの分類は非論理的に見える。しかしそれは、異なった大きさのブリに異なった価値が与えられていることの反映でもある。ハマチならば安価なので、人にやろうとか、マルゴならば大きくて珍しいのでごちそうにしようとか、ブリならば高級だが脂がかなり乗っている、ブリしゃぶにしよう、などである。このように、言語は連続的な世界を切り分け、それぞれの対象への価値付け（文化的意味、生態心理学的に言えばアフォーダンスの異なりを含む）を行う機能を持つ<sup>2</sup>。

本稿では、言語の分析を通じて、言語使用者が自然（動植物）をどのように理解し、どのように環境世界をカテゴリーに分けているのか、その一端を明らかにする。言語学においては、言語と文化の関係について大きく2つの観点から研究が行われてきた。1つはいわゆる言語相対論の系譜であり、異なった言語を持つことが、彼らの注意、知覚、推論、行動などの非言語的な要素にどのような影響を及ぼすのかに関する研究である<sup>3</sup>。他方、本研究で取り扱うように、文化がどのように言語に反映されるかについても研究されてきた。Wierzbicka (1979) や Enfield (2002) は、民族統語論 (ethnosyntax) という概念を用い、個別言語の文法にどのような文化的影響が見られるかを考察している<sup>4</sup>。しかし言語研究全体を見渡した場合、言語構造を文化的側面から説明するという試みは本格的になされてきていない。その理由は、個別言語の

文法がはっきりとその土地の風土、文化の影響を受けて今ある形になっていると確認できる例に限られている点にある。言語学の分野外の人々が想定している以上に、ある言語の文法が、その言語が生み出された社会の風土や文化(慣習、儀礼規範、衣食住の様態等)に影響をうけて発達したと推測できる例は多くない。

そこで本研究では、より文化的意味を豊富に含む、語彙項目に着目して言語と文化の関係を見ていく。特にここで注目するのは、名詞から作られる動詞である。例えば、フィリピンの狩猟採集民の言語、アルタ語では、*laman* 「イノシシ」という名詞に動詞を作る形式の一つである *man-* (～する)を付加すると、*mam-laman* 「イノシシ狩りをする」という意味の動詞になる。この動詞の構成要素である *laman* にも *man-*にも「～狩り」という意味は含まれていない。むしろ、ここでは彼らの文化特有の意味の補完が発生している。彼らにとってイノシシは、第一義的に狩猟の獲物であり、狩猟行為と強い連想関係にあるからである。本稿では、このような名詞を動詞化するプロセス、名詞派生動詞に着目することで、彼らが動植物をどのような存在として認識しているのか、その一端を明らかにする(派生という語の意味については 2.2 節で述べる)。

特に本論文で対象とする言語は、フィリピンのルソン島北部で話されている 4 言語、アルタ語、カシグラン・アグタ語、イロカノ語、カンカナウイ語(北部方言)である。アルタ語とカシグラン・アグタ語(以下断りが無い限り単に「アグタ語」と呼ぶ)の話者は狩猟採集文化を持つ民族集団であり、イロカノ語とカンカナウイ語話者は農耕文化の民族集団である。それぞれの言語は意思疎通ができないほどには異なっているが、同じオーストロネシア語族(マレー・ポリネシア語派の北部ルソン語群)に属しているため、言語構造上の類似性が高い。従って、もしアルタ語、アグタ語と、イロカノ語、カンカナウイ語との間に、何らかの言語的差異がある場合、それを生活様式の差異に帰着させる可能性が開ける。このような理由から、農耕民言語を 2 つ、狩猟採集民言語を 2 つ選択して比較を行う。

フィリピンの言語は、動詞の形と文の構造との関係が複雑で、言語比較、言語理論において長らく論争的になってきた。しかし、その種の議論では行為を表す動詞語根の議論が中心となっており、動植物などのモノの名前を表す名詞が動詞に派生したときにどのような意味が生まれるかについての体系的な研究は十分にされてきて

いない。この意味でも、本稿は言語記述にも新たな知見を提供することができるだろう。

## 2. フィリピンの言語の構造的特徴と分析対象

分析に入る前に、本稿が取り扱う言語とその分析手法について述べておく必要がある。本節では、2.1 で分析対象の言語の系統関係、話者数などの情報について、2.2. で言語音の表記法と言語学の用語について、そして 2.3. で本研究の分析手法について述べる。

### 2.1. 対象言語

フィリピンは186の言語が分布する多言語地域である(Eberhard et al. 2020)。入植者、移住者の言語を除き、フィリピンの言語は、オーストロネシア語族(Austronesian)のマレー・ポリネシア語派(Malayo-Polynesian)に属する。本研究で対象とする言語は表1の通りである。言語系統はすべてマレー・ポリネシア語派の中でも、ルソン島の北部に分布している北部ルソン語群(Northern Luzon)である<sup>5</sup>。表で見られるように、狩猟採集文化の民族集団は、農耕文化の集団に比べて小さい。本稿では、それぞれの例文、表現がどの言語のものかを区別するために、アルタ語をR、アグタ語をG、イロカノ語をI、カンカナウイ語をKと略し、<sup>R</sup>*bukagan*「女性」のように、表現の左肩に表示する。

表1 本研究で対象とする言語

文化	言語名 (本稿での略号)	言語系統	話者数 <sup>6</sup>
狩猟採集文化	アルタ語 (R)	北部ルソン語群	10人
	カシグラン・アグタ語 (G)	北部ルソン語群	600人前後
農耕文化	イロカノ語 (I)	北部ルソン語群	900万人
	カンカナウイ語北部方言(K)	北部ルソン語群	24万人

## 2.2. 本稿で用いる表記法と用語について

まず、音声の表記法は基本的にはアルファベットを用いるので、ローマ字読みをすれば通じる。しかしアルファベットだけでは表記しきれないため、国際音声記号(発音記号)を用いる音が二つある。*today* [tədeɪ]など英語の弱母音に見られる[ə]と、*sing* [sɪŋ]など英語の*ng*や、「さがる」[sagaru]などの日本語発音に見られる[ŋ] (いわゆる鼻濁音)である。

本稿で用いる言語学の用語について簡単に説明する。まず、*large* から *enlarge* 「拡大する」、*employ* から *employer* 「雇用主」など、ある単語から別の単語を作ること を **派生** という。最初に述べた、アルタ語の名詞を動詞化することも派生の一種である。特に名詞から派生した動詞のことを、「名詞派生動詞」とも呼ぶ。

そして、*enlarge* の *en-* や、*employer* の *-er* など、単語を作るときの付け加える付属形式のことを **接辞** と呼ぶ。本稿では、動詞が目的語をとらない動詞、**自動詞** であるか、目的語をとる動詞、**他動詞** であるかを、Vi か Vt かで区別する<sup>7</sup>。3 節の分析で挙げる例文を理解するための、フィリピンの言語の文法解説については付録を参照いただきたい。

## 2.3. 分析方法

本研究では、筆者によるフィールド調査と文献調査の両方の手法を組み合わせている。アルタ語は、筆者のフィールド調査とその調査結果を元としている (Kimoto 2017, 2019)。アグタ語は、アグタ語辞書 (Headland・Headland 編) と筆者の聞き取り調査を元としている。イロカノ語は、イロカノ語辞書 (Rubino 編) と筆者のフィールド調査がベースとなっている。最後にカンカナウイ語は、カンカナウイ英語辞書 (Wallace 編) とそこに出ている例文がベースとなっている。従って以下の例では言語略号を例の左肩に付けるのみとする<sup>8</sup>。

## 3. フィリピン諸言語における自然のカテゴリー化

動植物名詞の派生パターンへの調査より、以下の4つの意味的カテゴリーが確認された。それは、1. 有益な価値付けを持つ動植物 (3.1 節)、2. 有害な動植物 (3.2 節)、3. 不要・無益な動植物 (3.3 節)、4. 動植物の部位・産物 (3.4 節) である。これらのパ

ターンは4つの言語で高い頻度で使用されている。

### 3.1. 有益な価値付けを持つ動植物

ある名詞(N)が食料、材料など、その文化にとって有用、有益な動植物と捉えられる場合には、「Nを収集する、Nを取る」という動詞になるパターンが4言語すべてで認められた。例えば、(1)のような名詞がそのような動詞化用法を持つ。前節で述べたように、動詞化する場合は個々の言語で *ag-*, *maŋ-* などさまざまな形の接辞が付加されるが、多くの場合自動詞を形成する接辞である。

(2) ではカンカナウイ語の例が示されている。日本語では「カワニナ(タニシの仲間)」が目的語として訳されているが、原文では名詞「カワニナ」は動詞の一部となるため、実際には目的語のない構文(自動詞)である。

(1) 「～がNの採集をする、取る」(N = 派生元の名詞)

<sup>R</sup>*bagat*, <sup>G</sup>*bigit*<sup>9</sup> 「バナナ」 → <sup>R</sup>*mam-bagat* 「バナナを収穫する」

<sup>R</sup><sup>G</sup>*agima* 「カニ」 → <sup>R</sup>*maŋ-agima* 「カニを捕る」

<sup>R</sup>*dut*, <sup>G</sup>*apuy*, <sup>I</sup>*kayo* 「薪」 → <sup>R</sup>*man-dut*, <sup>I</sup>*manayo* 「薪を集める」

<sup>K</sup>*agodon*, <sup>R</sup>*aguruŋ* 「カワニナ」 → <sup>K</sup>*maŋ-agodon*, <sup>R</sup>*maŋ-aguruŋ* 「カワニナを捕る」

(2) <sup>K</sup>*Naŋ-agodon*      *si*      *ina*      *is*      *maisibo*.

(Vi 過去)-カワニナ (冠詞) 母 (前置詞) おかず

「母はおかず(用)にカワニナを捕った。」(Wallace 2018)

このパターンは特に、それを収集する目的で出かける場合に頻繁に用いられる。例えば、<sup>R</sup>*aguruŋ* 「カワニナ」から派生した <sup>R</sup>*maŋ-aguruŋ* 「カワニナを捕る、捕りに行く」という動詞は、その目的で採集行動を行う場合に用いられる。従って、文化的により慣習化された活動、行動とこの動詞化のプロセスが結びついていると言えるだろう。

アルタ語、アグタ語の狩猟採集民の言語で特に頻度が高く用いられるのは、狩りの対象となる動物から動詞を派生した「～を狩猟する」、「～狩りに行く」のパターンである。例えば、もっとも狩猟対象として好まれる <sup>R</sup><sup>G</sup>*laman* 「イノシシ」から動詞を派生さ

せると、<sup>R</sup>*man-laman* (Vi-イノシシ) 「イノシシ狩りをする／に行く」という意味になる。

(3) 「～が N を狩猟する、N 狩りをする」

<sup>R,G</sup>*laman* 「イノシシ」 → <sup>R</sup>*man-laman* 「イノシシ狩りをする」

<sup>R</sup>*bidut*, <sup>G</sup>*ogsa* 「シカ」 → <sup>R</sup>*mam-bidut* 「シカ狩りをする」

<sup>R</sup>*burog*, <sup>G</sup>*buhog* 「サル」 → <sup>R</sup>*mam-burog* 「サル狩りをする」

(4) <sup>R</sup>*Amma tidi*                      *aduwani*,                      *man-laman*, ...

もし      (冠詞・複数)      一部の人-(特定)      (Vi)-イノシシ

「一部の者がイノシシ狩りに行ったら、(別の者は里芋取りに行く)」

この「狩猟に行く」という意味になる動詞は、イロカノ語、カンカナウイ語などの農耕民の言語ではあまり観察されない。実際に本稿で参照した大部の辞書にもそのような名詞派生動詞は掲載されていない。従って、このような意味の動詞が作れるかどうかには、文化の違いが反映されていると言えそうである。狩猟が主な生業である狩猟採集文化をもつアルタ語、アグタ語では、このパターンが多く観察される、という傾向が見えるからである。

一方、人間にとって有益なものの中でも、一部の名詞概念は、「～を(料理に)加える」の意味になる。これは特に調味料などに当てはまる。フィリピン料理では、トマト、ごま、しょうが、にんにく、胡椒等を料理に加えることは多い。しかし一般の家庭ではそれらの材料は自分で収穫するのではなく、購入するのが一般的である。そのような食材は、「～を取る、～を収穫する」ではなく、他動詞接尾辞-*an* を付加して、「～を(料理に)加えて味付け、トッピングをする」の意味となる。

(5) 「～に N を加える、トッピングする、～に N で味付けする」

<sup>R,I,K</sup>*baway* 「にんにく」 → <sup>R,I,K</sup>*baway-an* 「～ににんにくを加える」

<sup>K</sup>*leja* 「ごま」 → <sup>K</sup>*leja-an* 「～にごまを加える」

<sup>R,G,I,K</sup>*kamatis* 「トマト」 → <sup>R,I,K</sup>*kamatis-an* 「～にトマトを加える」

<sup>R,I</sup>*laya* 「生姜」 → <sup>R,I</sup>*laya-an* 「～に生姜を加える」

- (6) <sup>K</sup>*K<in>amatis-ana nan bilis ay in-pilito-na*  
 <過去>トマト-(Vt.3 単) (冠詞) 干物 (冠詞) (過去)-揚げる-(3 単)  
 「揚げた干物にトマトを加えた(トッピングした)」(Wallace 2018)

これは、植物以外でも、「水」「塩」「砂糖」などの名詞でも見られる用法である。アルタ語で、*wagət* 「水」→ *wagt-an* 「水を加える」、*asin* 「塩」→ *asin-an* 「塩を加える」という派生は (7) の名詞と同様の類に属する。

- (7) <sup>R</sup>*Amma ma-sunpu-d, asin-an-di-d.*  
 もし (Vi)-湧く-(完結) 塩-(Vt)-(3 複)-(完結)  
 「もし(水が)湧いたら、そこに塩を加える。」

以上のように、ある動植物などの対象が、有用なものであると認識されている場合、「～を収集する」、「～を狩猟する」、「～を加える」という3つの類型が確認される。特にアルタ語とアグタ語では狩猟対象として認識される動物から動詞を派生させて、「～を狩猟する」という意味になる動詞化のパターンが観察される。その他の2つの用法は、どの言語にも観察される。

### 3.2. 有害な動植物

次に、動植物によっては、その名詞を動詞化すると「N に攻撃される」という意味になる語群が存在する。生物、無生物など身の回りの環境に存在するものが、当該文化の中で危険なもの、ないし害をもたらすものと認識されている場合にこのパターンが典型的に現れる。例えば、蚊、蜂、ヒル、毒蛇、(有害な)毛虫や、棘のついた植物などがその代表例である。

このパターンの派生においては、*-ən* (過去形は接中辞の<in>)、*ma-*、*na-*等が用いられる<sup>10</sup>。

(8) 「～が N に攻撃、悪さをされる」

<sup>R</sup>*ipəl* 「緑色の小さな毒蛇」→ <sup>R</sup>*ipəl-ən* 「毒蛇に噛まれる」

<sup>R</sup>*buŋor*, <sup>lK</sup>*lamok* 「蚊」 → <sup>R</sup>*buŋor-ən*, <sup>lK</sup>*lamok-ən* 「蚊に刺される」

<sup>K</sup>*naga* 「雀などの小鳥」 → <sup>K</sup>*na-naga* 「(それによってもたらされると言われる)  
発疹に見舞われる」

<sup>l</sup>*alawig* 「竜巻」 → <sup>l</sup>*na-alawig* 「竜巻で被害を受ける」

<sup>K</sup>*assisini* 「毛虫(の一種)」→ <sup>K</sup>*na-assisini* 「毛虫に触れて痒み・腫れが生じる」

(9) <sup>R</sup>*Meg-gitəl*      *da*      *b(ɨn)uŋor-de:-tən*      *aytay.*

(形容詞)痒み (接続詞) (過去.Vi)蚊-(てしまう)-(1 単) 今

「今蚊に刺されたので、(そこが)痒い。」

(10) <sup>K</sup>*Na-naga*      *nan*      *siki-da*      *isnan*      *nin-anīyan-da.*

(過去.Vi)-小鳥 (冠詞) 足-(3 複) (接続詞) (過去.Vi)-稲刈り-(3 複)

「稲刈りをしている時に、彼らの足が発疹に見舞われた。」

興味深い点は、どの生物、無生物がどのような危害をもたらすかは客観的に特定できない場合もあり、その理解には多分に文化的知識が必要である点である。例えばカンカナウイ語では、小鳥の糞が発疹をもたらすと信じられてきたために、*naga* 「小鳥」という名詞を動詞化した *na-naga* という自動詞においても、「発疹に見舞われる」という意味になる。つまり小鳥と発疹とに成立する文化固有的な因果関係が、言語にも反映されていることとなる。

危害を与えると考えられてきたものは、生物に限らない。農耕民、狩猟採集民に関わらず、超自然的存在を表す名詞は、意図的に攻撃を仕掛ける対象としてカテゴリー化される場合がある。また、病気、怪我の原因を霊的存在に帰着させることが一般的だったことから、(11) の最初の例のような派生も見られる。



## (11) 「～が N(超自然的存在)に悪さをされる」

<sup>G</sup>hayup 「動物、お化け」 <sup>G</sup>ma-hayup 「病気になる、気が狂う」<sup>R</sup>bekut 「お化け、精霊」 <sup>R</sup>bekut-an 「お化けに脅かされる」

上記の例はすべて、被害を被る主体が人間であった。しかし、被害を被るものは人間以外の生物、無生物の場合もある。以下の例では、木材、食材など人間にとって有用なものが被害を被る事象を表している。*bukbuk* という幼虫は、葺き屋根や柔らかい木材を虫食いにすることで知られる幼虫である。

## (12) 「(モノ)が N によって被害を受ける」

<sup>R, I, K</sup>bukbuk 「幼虫の一種」 → <sup>R, I, K</sup>ma-bukbuk 「(木材が)虫食いになる」<sup>R, I</sup>anay, <sup>G</sup>ane 「白蟻」 → <sup>R, I</sup>anay-ən 「(木材が)白蟻で虫食いになる」<sup>K</sup>gokgok 「アリの一種」 → <sup>K</sup>ma-gokgok 「(さつまいもが)アリにやられる」

以上のような生物、無生物は、典型的に被害をもたらすものと認識されているものである点で共通する。そのようにそれぞれの対象に対する否定的な文化的価値付けが、このような動詞化を可能にしていると考えられる。

ただし、一部の名詞は、一概に無益・有害な価値付け以上のものであっても、動詞に派生することで、攻撃の意味を持つものもある。例えば、イロカノ語で *aso*「犬」は、*aso-ən* という動詞で「犬に攻撃される」という意味になる。「攻撃」の意味を持つ動詞が派生できるからと言って、その動物が、文化的に無益、有害な価値しか持たないと言うことはできない。

### 3.3. 不要・無益な動植物

次に、これらの言語では、ある生物ないしその部位を表す名詞を動詞化させると、取り除くという意味になる場合がある。そのような意味の動詞を形成する名詞は、動物の皮、植物の表皮、動物の内臓、魚のうろこ、庭の雑草など、不必要と捉えられるものが多い。これは、当該文化において無益ないし不要なものとみなされる場合もあれば、調理や動物の解体など、ある特定の目的においてそれを取り除くことが必要

である場合もある。動詞接辞としては、*-an* が用いられる。

(13) 「～の／から N を取り除く」

- <sup>R</sup>*kubbaŋ* 「動物の皮」 → <sup>R</sup>*kubbaŋ-an* 「～の皮を取り除く」  
<sup>R</sup>*bituka* 「内臓一般」 → <sup>R</sup>*bituka-an* 「～の内臓を取り除く」  
<sup>R</sup>*kiskis* 「鱗」 → <sup>R</sup>*kiskis-an* 「～の鱗を取り除く」  
<sup>l</sup>*ramut* 「根」 → <sup>l</sup>*i-ramut-an* 「～の根を取り除く」  
<sup>K</sup>*logam*, <sup>R</sup>*kadət* 「雑草」 → <sup>K</sup>*logam-an*, <sup>R</sup>*kadət-an* 「～の雑草を刈る」  
<sup>l</sup>*buksil* 「(豆の) 鞘」 → <sup>l</sup>*buksil-an* 「鞘から～を取り出す」  
<sup>l</sup>*tita* 「白米に混じった粃」 → <sup>l</sup>*tita-an* 「～から粃を選んで取り除く」

(14) <sup>R</sup>*Ulit-aŋu*                      *i*                      *kamote-i*.

植物の皮-(Vt+1 単)    (冠詞)    サツマイモ-(この)  
「私がこのサツマイモの皮を剥きます。」

(15) <sup>K</sup>*Logam-am*                      *nan*                      *widan-yo*.

雑草-(Vt+2 単)    (冠詞)    庭-(2 複)  
「あなた方の庭の雑草を刈ったらどうですか。」

この例では、調理などのプロセスにおいて、動植物の一部である不要部位が除去される事象を表している。これは、同じ動詞接辞 *-an* を取る (6, 7) 「N を～に加える」の例と対称的である。「(ごま、生姜など)を加える」の例は、調理などのプロセスにおいて、完成品の一部をなす調味料などが料理という全体に統合される。つまり、同じ接尾辞 *-an* によって、部分全体関係が解消される事象 (13–15) と、部分全体関係が構成される事象 (6, 7)の両方を表すことができる。したがって、実際にどちらの意味になるかは、動詞接辞ではなく、元の名詞の意味とそれが喚起させる文化的フレームの差に求めることができる。

### 3.4. 動植物の部位、産物

「葉」「実」「種」「卵」「子」など、植物や動物の部位、生産物を表す名詞は、アルタ語、アグタ語、イロカノ語、カンカナウイ語それぞれにおいて、「Nが生える、生まれる、なる」などその出現・産出のプロセスを表す意味になる。この動詞は、自動詞接頭辞 *man-*, *ag-* (過去形 *nan-*, *nag-*) で形成される。

(16) 「Nが生える、生まれる、なる」

<sup>R</sup> <i>don</i> , <sup>l</sup> <i>bulon</i> 「葉」	→ <sup>R</sup> <i>man-don</i> , <sup>l</sup> <i>ag-bulon</i> 「葉を生やす」
<sup>R</sup> <i>bunja</i> 「実」	→ <sup>R</sup> <i>mam-bunja</i> , <sup>l</sup> <i>ag-bunja</i> 「実をつける」
<sup>R</sup> <i>ramut</i> 「根」	→ <sup>R</sup> <i>man-ramut</i> , <sup>l</sup> <i>ag-ramut</i> 「根を伸ばす」
<sup>l</sup> <i>urat</i> 「血管、根」	→ <sup>l</sup> <i>ag-urat</i> 「血管、根を伸ばす」
<sup>K</sup> <i>itlog</i> 「卵」	→ <sup>K</sup> <i>um-itlog</i> 「卵を生む」
<sup>R</sup> <i>ana</i> , <sup>l</sup> <i>anak</i> 「子」	→ <sup>R</sup> <i>may-ana</i> , <sup>l</sup> <i>ag-anak</i> 「子どもを産む」

(17) <sup>R</sup>*Ni-mula*      *ni*      *dagga*      *i*      *bagat-na-y*,  
 (過去.Vt)-植える (冠詞)      亀      (冠詞)      バナナ-(3単)-(この)

*nan-don-di*.

(過去.Vi)-葉-(完了)

「亀が自分のバナナを植えると、葉をつけた。」

すぐ上で見た「Nを～から取り除く」というパターンと同様、ある動植物全体のうち、その部分を表す名詞がこの用法では多く観察される。したがってイロカノ語の *ramut* 「根」はその両方の用法が見られる。この名詞は、他動詞接辞 *i-* *-an* を取ると *i-ramut-an* 「根を取り除く」となり、自動詞接辞 *ag-* を取ると、*ag-ramut* 「根を伸ばす」となる。

### 3.5. まとめ

以上の結果は表2のようにまとめられる。まずこの表でも示されているように、4つの言語で見られる動詞化のパターンには、強い類似性が観察される。すべての言語

で同一もしくは類似形式の接辞を用いて、似通った意味の動詞を形成する。当初の予測に反して、狩猟採集文化の言語と農耕文化の言語で差異が見られたのは、2 つ目の「N を狩猟する」という部分のみであった。伝統的に狩猟採集文化を維持してきた話者集団の言語であるアルタ語、カシグラン・アグタ語では、動物の名前から派生させる「イノシシを狩猟する」「シカを狩猟する」などの動詞が多い。実際、狩猟を表す語彙に限って言うと、アルタ語、アグタ語両言語は、「狩猟する」という総称的言い方が存在せず、「猟犬を連れて狩猟する」、「複数人で待ち構えて狩猟する」、「月夜に狩猟する」など、10 以上の表現を使い分ける。つまり、狩猟に関する語彙においては、アルタ語、アグタ語両言語と、他の2 言語との差異が際立っている。しかし、他のカテゴリーにおいては、4 言語で動詞化のパターンの差異は観察されなかった。

表 2 フィリピンでの 4 言語における動植物名詞からの派生動詞

	元の名詞	派生接辞	派生動詞の意味
有益な 動植物	バナナ、蟹、カワニナ など、有益な動植物	<sup>l</sup> ag-, <sup>RGIK</sup> maŋ-, <sup>G</sup> məg- など	「N の採集をする、取る」(自動詞)
	猪、鹿、猿などの狩猟 の対象	<sup>R</sup> maŋ-, <sup>G</sup> məg- など	「N を狩猟する、N 狩りをする」(自動詞)
	にんにく、胡麻、トマト、 生姜などの調味料	<sup>RGIK</sup> -an など	「～に N を加える、トッピングする、～に N で味付けする」(他動詞)
有害な 動植物	毒蛇、蚊、竜巻、毛虫、 おばけ、精霊など	<sup>RGIK</sup> -ən, <sup>RGIK</sup> ma- など	「N に攻撃、悪さをされる」(自動詞)
	幼虫、白蟻など	<sup>RGIK</sup> -ən, <sup>RGIK</sup> ma- など	「モノが N によって被害を受ける」(自動詞)
不要・ 無益な部位	動物の皮、内臓、鱗、 雑草などの不要物	<sup>RGIK</sup> -an など	「N を～から取り除く」 (他動詞)
動植物の 成長部位	葉、実、根、血管、卵、 子など、成長してできる 部分	<sup>l</sup> ag-, <sup>RK</sup> maŋ-, <sup>G</sup> məg- な ど	「N を生やす、生み出す、 伸ばす」(自動詞)

一方で、4言語に共通する点として、自然物が人間とどのような関わりを持っているかという点での意味付けが大多数であった。「N を収集する、取る」「N を狩猟する」「N を～に加える」「N を～から取り除く」などはすべて主語が人間による行為である。それは、上記のカテゴリーの大部分は、人間が自然にどのように働きかけるかが焦点化されていることを意味する。「N に攻撃、悪さをされる」という意味は、人間に対する行為である点で人間は行為をする側ではなくされる側である。しかしそこでも、依然として主語は人間である。

この動詞化のパターンには、言語の意味における人間中心的(anthropocentric)な視座が反映されていると見ることができる (Dirven and Verspoor 2004: 6)。そもそも言語は人間によって用いられ、人間に理解されるという性質上、人間を中心に語りが組み立てられやすいというのは古くから指摘されていることである<sup>11</sup>。このような傾向を反映して、動植物の名詞からの動詞派生も人間を行為者ないし主語とするパターンを取りやすいといえることができるだろう。

#### 4. 名詞カテゴリー化装置としての名詞派生動詞

以上のようなフィリピンの言語の派生動詞のパターンが、言語と文化との関係性に対して示唆を与えることができる点はどこだろうか。1 点目に、名詞がこれほどまでに動詞を生み出す力を持っているということは、名詞は決して単なるモノ的存在を指すことにとどまらないということである。ある名詞が動詞に転用されるということは、その名詞が指す対象が、単なる物体としてではなく、モノが潜在的に持つ行為、変化、価値とともに認識されていることを示している。例えば、樹木の「実」や「葉」については、人はそれらがある季節に成熟したり、伸長したりすることを知っている。そのような知識が、名詞から動詞を作るときの概念的な支えとなっている。

その種の知識は部分的に文化を超えた一般性を持つ場合もあれば、当該文化に固有の場合もある。例えば、樹木が「実」を付けたり、「葉」を伸ばしたりするのは、その人が身に付けている文化がどのようなものであっても、どここの文化の者であっても、身近に感じられる潜在的な変化であろう。一方で、動物の「革」が持つ潜在的な行為の可能性は文化によって異なる。上述したようにフィリピンの多くの文化ではシカなどの革は不要なものとして捨てられるため、<sup>R</sup>kubbaṅ-an 「～の革を除去する」となるが、

別の文化では革を鞣して工芸品に用いられる点が重視され、「～に革を貼り付ける」という意味になってもおかしくないだろう。

2 点目に、これら名詞から作られる動詞は、言語固有の方法で、名詞を言語がさまざまにカテゴリー化する、名詞カテゴリー化装置(Noun categorization device)として機能している。以下では名詞を分類、ないしカテゴリー化するという観点からこの現象を考察する。

世界の言語を見ると、言語によってさまざまな文法的手段で名詞を分類することが知られている。まず、フランス語、イタリア語、ドイツ語など、ヨーロッパの言語に広く見られる男性名詞、(中性名詞)、女性名詞の区別は、性(gender)による名詞の分類である。日本語の「一人の女性、一匹の犬、一頭の熊、一尾の鮭、一杯の烏賊」などは、助数詞ないし類別詞(classifier)と呼ばれ、その名詞に数詞を付ける際に、その名詞を形状、大きさ、生物・無生物などの種類によって分類する機能がある。

名詞の分類は、客観的特徴ではなく、連想関係、神話的繋がりなど、複雑な意味的ネットワークをなしている場合もある。オーストラリア原住民語のジルバル語では、名詞がどの標識に導かれるかによって4つのクラスがあり、*bayi* に後続する名詞(男性、人間以外の生物など)、*balan* に後続する名詞(主に女性(人間)、水、火、争いなど)、*balam* に後続する名詞(肉以外の食べ物など)、*bala* に後続する名詞(それ以外)に分けられる。しかし、「鳥」は人間以外の生物であるため、*bayi* クラスに分類されると期待してしまいが、当該アボリジニの神話において鳥は死んだ女性の魂と考えられているため、人間の女性を含む *balan* クラスに分類される (Dixon 2010)。

また、名詞の分類は、その名詞がどのような行為と結びつくかと関連する場合もある。例えば、ポリネシアの言語は、「A の B」という所有関係を表す形式が4つあり、どの形式がどの名詞に対して使われるかは、どのような所有関係を表すかによって異なる (Blust 2013)。例えばフィジー語では、所有物・所有者が分かちがたく結びついている場合はAとBが直接連結する(*ulu-na* 頭-3 単数「彼(女)の頭」)。一方で、AがBを食べる(彼のタロイモ)、飲む(彼の柑橘ジュース)、所持する(彼の家)、などでは、それぞれ *ke-*, *me-*, *no-*という接辞を用いて表現されなければならない (Blust 2013: 483)。これらの言語では、名詞がある構文で現れるときに、どのような所有関係を含意するかによって、4つに分類されている。

このように考えると、アルタ語ほかフィリピンの言語における動詞派生のパターンは、言語を比較すると、決して特異な現象ではないことが分かる。表 2 で示されている通り、それぞれの動詞派生のパターンは、動詞を作る元となる名詞を分類する役割を果たしている。そしてフィリピンの言語は、フィジー語の所有構文のように、名詞がどのような行為、事象と連想関係にあるかによって分類されているとみなすことができる。まず大分類として、人間にとってどのような価値を持つかによって分類され、その価値に応じてどのような行為、事象と関連するかで動詞派生のパターンが決定される。例えば、有益な動植物の場合、それが、収集の対象か、狩猟の対象か、またはなにかの調理工程で加えるべき対象であるかが名詞を分類する際の基準となっている。

ただし、多くの言語における文法上の名詞分類と異なる点は、すべての名詞をこの動詞化によって分類するわけではない、という点である。この論文で挙げた基礎的な語彙は基本的に動詞用法を持つが、すべての名詞が動詞化の対象になるわけではない。「実」→「実がなる」、「生姜」→「生姜を加える」、「竜巻」→「竜巻の被害を受ける」など、ある行為と強い連想関係にある名詞を中心に派生動詞が存在するのみである。従って、この動詞化によってもたらされる名詞のカテゴリー化は、二次的な名詞カテゴリー化装置 (secondary noun-categorizing device) と呼ぶことができよう。この「二次的な」というのは、すべての名詞が有限個のカテゴリーに分類される基本的なカテゴリー化ではなく、動詞派生のターゲットとなる名詞のみが分類の対象となっている点を考慮した表現である。

## 5. 結語

本稿では、当該言語が言語記号によってどのように世界をカテゴリー化しているかについて、動植物名詞から派生して作られる動詞に着目して分析を行った。この研究では、フィリピンで話されている 4 つの言語、狩猟採集民言語のアルタ語、カシグラン・アグタ語と、農耕民言語のイロカノ語、カンカナウイ語を分析した。それによって、フィリピンの言語が共通して持っている派生動詞の意味に関する特徴、そして狩猟採集文化、農耕文化という生活様式の違いがもたらす分節化の違いを調査した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 4つの言語に共通して、有益な動植物、有害な動植物、不要・無益な部位、動植物の成長部位、という4つの大区分によって、派生動詞の意味が記述できる(3節)。
- 狩猟採集文化、農耕文化の違いは、主に、動物から派生する動詞が「～を狩猟する」という意味になるかどうか、その生産性において異なるが、その他のカテゴリーでは両文化の差を超えて一般性を有する(3節)。
- この派生動詞は、名詞が当該言語の中でどのようにカテゴリー化されるかという点で、ヨーロッパの言語の性(gender)、日本語などの類別詞(classifier)などと並ぶ、名詞カテゴリー化装置の一環として捉えることができる。ただしすべての名詞のカテゴリー化はもたらさないという点で、二次的な名詞カテゴリー化装置(secondary noun categorizing device)として位置づけることができる(4節)。

今後はこの分析をフィリピンのほかの語群(特により南に分布する言語)に広げて、どのような差異と共通性が見られるかを明らかにしていく必要がある。またこの分類の妥当性についても言語数、データ量を増やして検討していく必要がある。

#### <付録 文法概要>

本稿での例文を理解する上で最低限必要な文法の説明を行う。一般的に文の語順はVSOで、動詞が主語と目的語に先行する。また名詞は冠詞<sup>12</sup>や前置詞によって導入される。

- <sup>R</sup>[Dinagayday] [ni ama-mi [tidi giləŋan-i].  
追った (冠詞)<sup>13</sup> 父-我々の (冠詞) 男-この  
「我々の父が、この男たちを追いかけていった。」

ただし、代名詞<sup>14</sup>の場合には、動詞の直後の位置に付加される。



- <sup>R</sup>[*Dinagayday*]-**tid**            [*ni*        *ama-mi*].  
追った            -(彼ら) (冠詞) 父-(我々の)  
「我々の父が、彼らを追いかけていった。」

動詞は、自動詞ないし他動詞の接辞を付加することにより、動詞として用いることができる。動詞を形成する主要な接辞は以下の通りである。

- 自動詞 <sup>RGIK</sup>*-um-/-om-*, <sup>RGIK</sup>*ma-*, <sup>RGIK</sup>*maŋ-*, <sup>I</sup>*ag-*, <sup>G</sup>*mæg-*  
他動詞 <sup>RGIK</sup>*-ən*, <sup>RGIK</sup>*-an*, <sup>RGIK</sup>*i-*

さらなる文法解説については、個々の言語の文法概説・文法スケッチを参照のこと。

<sup>1</sup> 本研究は以下の科学研究費助成を受けている。若手研究 20K13029「オーストロネシア化したフィリピン狩猟採集民言語の言語人類学・認知言語学的研究」(代表: 木本幸憲)、国際共同研究加速基金(国際共同研究強化 B) 19KK0011「インドネシア・フィリピンにおける少数言語の記録とコーパス構築に基づく研究」。また本研究の一部はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「The Social Cognition Parallax Interview Corpus(SCOPIC)に基づく社会認識の言語標示に関する研究」によって行われた研究に基づいている。

<sup>2</sup> この世界の「切り分け」を分節化とも言う。フェルディナン・ド・ソシュール(影浦・田中訳 2007: 168–175)、構造主義における意味場の研究(Lyons 1977: 230–335)も参照。もちろん、言語が歴史的に積み重ねられてきた慣習の体系である以上、今ある言語的区別がすべて実生活上の機能的な区別に役立っているとは言い切れない。例えば古くから縁起のよい魚として親しまれてきたボラも出世魚である。しかし、現在ではボラは都市部の海などにも生息する臭みのある魚などと認識され、評判はよくない。従って現在出世魚としてのボラの区別がどの程度日本語話者にとって相当に価値があるかどうかは不明である。

<sup>3</sup> 言語相対論については、Whorf(1956), Lucy(1992), Levinson(2003), Imai et al.(2010)などを参照。

<sup>4</sup> 他にも池上(1981, 2011), Silverstein(1985), 室山(1998), Newman(2002), Sharifian(2017)等を参照。

<sup>5</sup> 北部ルソン語群については Reid(1989), Robinson and Lobel(2012)を参照。ちなみにフィリピンの国語ともなっているタガログ語(国語としての名称はフィリピン語)は、中央フィリピン語群(Central Philippine)に属する。

<sup>6</sup> 話者数についての詳細は Eberhard et al.(2020)、狩猟採集民と農耕民の話者数の差については Headland(2003)、木本(印刷中)を参照。

---

<sup>7</sup> 自動詞は英語で *intransitive verb* なので Vi、他動詞は英語で *transitive verb* なので Vt である。

<sup>8</sup> アルタ語については、例文 (6) は Kimoto (2019) の *arta\_arsenyo*、例文 (19) は未出版の談話データ *arta0674* ファイル、例文(9, 11)はフィールドノートから採っている。

<sup>9</sup> 本稿ではアグタ語の派生形は記さない。Headland and Headland (1974) には派生接辞付きの形式が記されていないためである。

<sup>10</sup> *-ən* は本来他動詞を派生する接辞であるが、この意味では自動詞を派生する機能を有する点で特異である (Liao 2004 を参照)。

<sup>11</sup> 人間を表す名詞と主語との結びつきについては DuBois (1987), Haig and Schnell (2016) を参照。

<sup>12</sup> 冠詞は格、数によって変化をする。3 行目の訳で、*tidi giləyani* が「この男たち」という訳になっているのは、複数の意味を持つ冠詞 *tidi* が使われているからである。しかし本稿ではこれ以上立ち入らない。

<sup>13</sup> 文法的機能を持つ語の注釈は (冠詞) など括弧を用いて、語彙的な意味を持つ語と区別する。

<sup>14</sup> 以下では代名詞の略称として 1 単 (=1 人称単数)、3 複 (=3 人称複数) という表記法を用いる。しかし実際には代名詞は人称と数の他に格の区別がある。例えば (2) の *-tid* は 3 人称単数の主格形、*-mi* は 1 人称複数 (聞き手は含まない) の属格形である。

## &lt;参考文献&gt;

- Blust, Robert. *The Austronesian languages, Revised edition*. Canberra: Australian National University, 2013.
- Dirven, René and Marjolyn Verspoor. *Cognitive exploration of language and linguistics*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 2004.
- Dixon, R. M. W. *Basic linguistic theory 1: Methodology*. Oxford: Oxford University Press, 2010.
- Du Bois, John W. The discourse basis of ergativity. *Language* 1987, 63, pp. 805–55.
- Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.). *Ethnologue: Languages of the world, twenty-third edition*. Dallas, Texas: SIL International, 2020.
- Enfield, Nick. (eds.) *Ethnosyntax: Explorations in grammar and culture*. Oxford: Oxford University Press, 2002.
- Haig, Geoffrey, and Stefan Schnell. The discourse basis of ergativity revisited, *Language*, 2016, 92(3), pp. 591–618.
- Headland, Thomas N, and Janet D Headland. *A Dumagat (Casiguran) – English dictionary*. Canberra: Australian National University, 1974.
- Headland, Thomas. ‘Thirty Endangered Languages in the Philippines’, *Work Papers of the Summer Institute of Linguistics University of North Dakota Session* 2003, 47: 1–12.
- 池上嘉彦. 『「する」と「なる」の言語学: 言語と文化のタイポロジーへの試論』東京: 大修館書店, 1981.
- 池上嘉彦. 「日本語と主観性・主体性」澤田治美(編)『主観性と主体性(ひつじ意味論講座 第5巻)』東京: ひつじ書房, 2011.
- Imai, Mutsumi, and Saalbach, H. Categories in mind and categories in language: Are classifier categories reflection of the mind? In B. Malt & P. Wolff (eds.), *Words and the mind: How words capture human experience*. New York: Oxford University Press, 2010, pp. 138–164.
- Kimoto, Yukinori. A Grammar of Arta: A Philippine Negrito language. Ph.D. Dissertation, Kyoto University, 2017.
- . Multi-CAST Arta annotation notes. In Haig, Geoffrey & Schnell, Stefan (eds.), *Multi-CAST: Multilingual corpus of annotated spoken texts*, 2019.
- 木本幸憲. 「変化する社会への適応方法としての「危機」言語: フィリピンのアルタ語の活性度と消滅プロセスから」『社会言語科学』第23巻第2号(印刷中).
- Liao, Hsiu-chuan. Transitivity and ergativity in Formosan and Philippine languages. Ph.D. dissertation, University of Hawai‘i, 2004.
- Levinson, C. Stephen. *Space in language and cognition: Explorations in cognitive diversity*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Lucy, John. *Language diversity and thought: A reformulation of the linguistic relativity hypothesis*, Cambridge: Cambridge University Press, 1992.

- Lyons, John. *Semantics I*. Cambridge: Cambridge University Press, 1977.
- 室山敏昭. 『生活語彙の構造と地域文化: 文化言語学序説』大阪: 和泉書院, 1998.
- Newman, John. Culture, cognition, and the grammar of ‘give’ clauses, In Enfield, Nick (ed.) *Ethnosyntax: Explorations in Grammar and Culture*. Oxford: Oxford University Press, 2002, pp.74–96.
- Reid, Lawrence A. Arta, another Philippine Negrito language. *Oceanic Linguistics* 1989, 28(1): 47–74.
- Robinson, Laura C, and Jason William Lobel. The Northeasterm Luzon subgroup of Philippine languages. *Oceanic Linguistics*, 2013, 52(1): 125–168.
- Rubino, Carl R. *Ilocano dictionary and grammar*. Honolulu: University of Hawai‘i Press, 2000.
- Saussure, Ferdinand de. *3 ème cours de linguistique générale*, 1910 [影浦峽・田中久美子(訳)『ソシュール 一般言語学講義 コンスタンタンのノート』東京: 東京大学出版会, 2007.]
- Sharifian, Farzad. *Cultural linguistics: Cultural conceptualisations and language*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 2017.
- Silverstein, Michael. Language and the culture of gender: at the intersection of structure, usage, and ideology. In Mertz, Elizabeth and Richard J. Parmentier (eds.) *Semiotic mediation: Sociocultural and psychological perspectives*, Orlando, Fla: Academic Press, 1985.
- Wallace, Judy. *Northern Kankany – English Dictionary*, SIL International, 2018.
- Whorf, Benjamin L. *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge, MA: MIT Press, 1956.
- Wierzbicka, Anna. Ethnosyntax and the philosophy of grammar, *Studies in Language*, 1979, 3(3): 313–83.